

# きぶのわらわ

N046 月刊

昭和七年四月一日 発行 (非売品)  
 発行所 岡山県都窪郡吉備町東町二五字垣方  
 吉備 親老 協会

○ 戸川達安の室について

福島県博多の日蓮宗香正寺の過去帳に朝鮮人日延上人の姉は、備中庭瀬藩主戸川達安公(初代藩主)の室となり、萬治元年(一六五〇)八月六日卒す。本樹院妙慶(日法大姉)とあり。年齒並に墓標は明々でない。この日延上人について千葉県小湊の誕生寺什物の過去帳に(この過去帳はもと塔中の龍潜寺の過去帳であつたが、同寺は慶長の末期火災のため堂宇全焼して廢絶した)。抑当寺開闢者。本山十八世日延上人也。是日延上人御生回尋。朝鮮國季昭大王之子。順和、臨海西王子。今寧而捕。小西行長共和。令還清正。其後清正臨海君御子男子一人女子一人献秀吉公。其男子者。清正密稱吾子育成。是生長之後。僧為出家今也。日延聖人斯也。既為誕生寺貫主。依之清正國主忠義公(義康の嫡男)新隱居之儀。則有公逝去之後。日延聖人國主忠義公(義康の嫡男)新隱居之儀。則有免除。故龍潜院殿為牌料二十石。當寺令隱居。既寄主忠義公高源院殿是也。夫已前日延聖人有當寺。御隱居。次日延聖人寺山号稱。歴代同祖。記左 當寺尊 本山日延聖人御筆 常付 桑門星傳 識之とあり。次に歴代の住職の法諡が記してあるが畧す。

一 この王子順和君(シエウウ) 臨海君(イヌハイ)の二王子を捕虜として帰還した。それより弟の臨海君(イヌハイ)には姉弟の二人の子があつた。その男の

子は加藤清正が密かに吾子の如く養育して佛門に入れて出家させた。これが長じて誕生寺の貫主になつた。十八代日延聖人である。

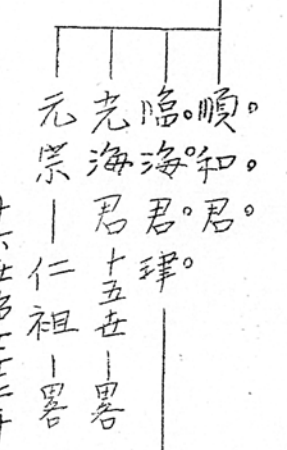
安房國主里見義康の帰依によつて榮えたが、義康が逝去してその子忠義が襲封した。忠義は故あつて隱居を命ぜられたので、父龍潜院殿の牌料として二十石を當寺に寄進して當寺に隱居した。この時日延聖人が義康の法諡に因んで寺号を龍潜寺に改めたのである。

(忠義の隱居の理由は大久保事件によるものといわれている。この事件といふは、天下の御指南書として有名な旗本三千石大久保彦左衛門忠教(寛永十六年二月八日ハナオで歿した)の甥にあつた大久保一門の宗家筋の小田原城主七万石大久保忠隣(千カ)の代に政治的の失脚によつて改易せられたことがある。大久保家はその先祖は三河武士にして、徳川家にはへて忠勤をはげみ、譜代きつての信望が厚かつたが幕府の重臣本多正信と、どうもそりが合はず、偶忠隣の指掌した佐渡銀山の奉行、大久保長安(慶長十八年二月廿五日ハナオで卒す)の不正行為が暴露され、これに連坐して罪せられ、また里見忠義もこの事に關係があつてその地位を失つたのである。忠義は元和八年六月十九日(一六三二)に卒し家は断絶したのである。

△ 日延聖人の畧系  
 朝鮮李朝(李成桂始祖) ————— 宣祖(李昭) 十四世 五十九才死 治世四十二年

某本樹院妙慶  
 女 萬治元年八月六日備中庭瀬藩主

男 日延聖人 九州博多香正寺、妙安寺開山、妙安寺には戸川姓の銘ある墓石数基あり。



△ 李朝(朝鮮)は高麗王に仕えた李成桂という武将が、高麗王の暴政に業じて自ら兵権を握りついに王位につき國号を朝鮮と改めて太祖になつた。これは我國の南北朝時代の末期、元中九年

(一九三三)の年である。五百年前朝鮮は統一されたが、いたる波乱を至り明治四十二年(一九〇七)に日韓合併による事実上我國の植民地になった。しかれ我國は其後英米を相手國として無謀な戦争を惹き起し大敗して昭和十一年無條件降伏の結果、再び朝鮮は独立した。

以上の諸文書によつて考究すれば本樹院妙慶は香正寺の過去帳に明示してゐるので違安の室なることは疑ふ余地は更になが、戸川家系譜に見当らない。思ふに室は朝鮮人であつたので忌避して正永に入れなかつたのではないかと考へられる。本樹院は弘安年令、俗姓が遷去帳に載つてゐないが、萬治元年に八十才前後の高齡を保つて生涯を終つたとすれば、本樹院が父臨海君と共に我軍に捕えられの身となつた文祿の頃は、芳宮まさに十六、七歳であつたことになる。当時違安はまだ一回の城主ではなく、宇喜多秀家の一部将として従軍してゐるのである。歳は二十五、六歳、血氣にまかせて陣中で一夜の契を結んだものではなかつたかと思ふ。

△

次に妙安寺には戸川姓の墓標があるといへば、本樹院との間に実子があつて戸川氏を名乗り、子孫がこの地方に栄えたのではないかと思はれる。なおこれによつては充分の調査を要する。

朝鮮の役についで簡単に述べてみたい。

朝鮮の出兵は文祿元年(一五九三)岡山城主宇喜多秀家を総帥として十六万の陸軍と、一万の水軍を出動せしめた。釜山に上陸し向ふところ敵影なく、僅か二十日にして京城を陥れた。朝鮮王李昭王は義州に逃れて明軍の救援を求めた。また一般民衆の勇敢な働きにたよつた。明軍の水軍は叔海上の弱体をついて大いに破つてきた。

陸軍の部将加藤清正は長駈咸鏡道に進撃して三王子を虜にした。レ



かれ平安道に入った小西行長は平壤の戦線で、李如松の大軍と對峙して撃破されて後退した。これのため後続部隊は前進を阻まれた。ここに行長は媾和論に傾き、明軍と和を結んで全軍を帰陣せしめた。だが、この媾和條約は文書のなかに「特封、兩、為、日本國王」の言葉があつたので、秀吉は激怒し、再び慶長二年(一五九七)一月に小早川秀秋を総帥として十四万の大軍を

牛島に進發させた。倭兵は前回の意気がなく、悪戦苦闘を極めた。勇猛の部将といわれる加藤清正のときは蔚山城で明軍の重圍に陥り、食糧に窮れ、將兵はネズミや軍馬まで殺して偶その翌年に秀吉は

△  
この戦は前後を通じて七年に亘る無謀な侵襲戦争であつた。尨大な軍費と多くの人命を失つてなにも得る處がない結果を招いた。  
「おどんが、うちんちゆうて、たが泣いてくりよか、裏の松山蟬が泣く」  
うじて行はれたようである。



蟬じやござらぬ 妹でござる 妹なくなよ 氣にかかる」。これは熊平果の五本地方に傳わつてゐる哀しい民謡である。これは朝鮮の役に若ものたちが、強制的に連れ去らるる、戦場に身を晒し、再び故郷の土を踏むことの出来なかつた悲嘆さおうたつたのである。「おどん」は「私くれ」。「うちんちゆうて」は「死んだとて」の意である。戦争による人類の悲惨なことは、いまもわかりぬない。「二度と戦争はくりかえしたくない」と、大東亞戦争の結果ほど、國民全体が自覚したことはあるまい。三百六十余年を至過した朝鮮の役のような不利な戦況が、その事實を固げて後世に傳へる所にあやまつた考を起さす原因となる。歴史は偽りのないことを傳へ、その出来ごとを顧みて現在、未來をあやまらぬことである。そこに歴史の重要性があると思ふ。

△ 宣祖昭敬大王實録の卷十五の一節に 我朝出而不誨。我國兩國但。有人能擒斬平秀吉、平秀沈及僧玄蘇者每名。賞銀一萬兩封伯女襲。擒斬平秀家、平秀忠、平行長、平義智、平鎮信、等有名。諸首者每名。賞銀五千兩女襲。持樽使以下擒獲各有賞格。兩國臣民沮。能奉時糾衆共。立大功。既可以復本。云々。此は宣祖朝壬辰の役（文祿元年）の條に於て文中に、秀吉、僧玄蘇（前田利家）等を擒斬したものは一萬兩を授けて、伯（首長）に封ずる。また秀家、秀忠、平行長を擒斬したものは五千兩を授ける。などの名が見られる。おもしろいことには姓にいづれも平姓を書き、てゐる。平姓のあらわれたのは朝鮮の役々々四百年前の平清盛全盛時代であるが、朝鮮では平氏を日本最高の武將と思つてゐたのであろう。最も秀吉の仕へた織田信長は平氏の宗葉であるから、これに

よつて書かれたものとも考へられる。秀吉の死後、その子秀頼が嗣を継いだが、天下の支配権は諸大名、

△ 中最も勢力のあつた徳川家康に自然流れてくる趨勢を示した。その自然に逆ふとする處に争ひが起る。これが関ヶ原の役である。朝鮮の役の第一回の出勤に総帥にあつた備前國主宇喜多秀家は反家康方にあつて敗れ、第二回の総帥になつた小早川秀秋は初め反家康方に盟約したが、途中家康方に味方して勝捷し、秀家の領地を没收して岡山城主に就封したが一年余に於て死去し、その家は断絶した。小西行長も反家康方にあつて捕えられて首を刎られた。加藤清正は内心反家康組であつたが、石田三成と平素性格があわず、関ヶ原には深入しなかつたので安堵し、肥後守國二十万石を領し、後ちに小西行長の所領、宇佐二十万石を併せまた加増によつて五十二万石の雄藩となり熊本城を治した。レカレ聲に秀吉の恩顧を忘れず、徳川幕府が置かれた参勤交代の際は、途中大坂に立寄つて秀頼の安否を問ふたという。清正は日蓮宗の熱心な信者で慶長十六年六月廿四日、四十九才で薨死した。省為轉變、人間の運命ははかり知りがたいものである。（秀秋には御女との間に一子があつた。因縁せられて足守藩主本下氏は秀秋と親族の間柄であつたので、足守にて養育された。だが同族なく死し、小早川氏の血統は全く絶えた。この時時藩士吉田源五兵衛方行の子に久米之丞というものがあり、姓を冒して自ら小早川秀雄と稱して小早川氏の復讐を志した。小早川氏は毛利氏の一族であるので長州に赴いて再興の話をした。毛利氏は使者を足守に遣はして議したが、足守氏は徒らに事を構えて幕府の忌諱に触れることを恐れて沙汰やみとなつた。秀雄はその素志の通らぬことを遺憾に思ひ、不満をもつた。父兄はこれが家累に及ぼんことを恐れて秀雄を致仕させた。秀雄は漢書に精しく、又よく史傳を好み、宇佐美流の文學者であつた。晩年は倉敷の富豪林源十郎に寄食した。当時林家は中國第一といわれる古今の群籍を蔵してゐたので、これを

諸破し大に學識を得た。畫は山野を歩み名所舊跡を探り或は古老を歴訪して古本古書ありては孤燈の如く群籍を繕じて研究に耽じた。かくして著書百餘を集成した。これが吉備國史である。しかし未編を脱せしめて嘉永六年正月三日、五十二才で歿した。法名を平秀院軍功内院居士とす。(清正の居城であった熊本城は明治六年徵兵令による熊本鎮台が置かれた處である。当時司令官には谷干城、参謀は川上操六、樺山資紀等の軍隊が駐屯していたが、明治十年の西南の役に薩軍の西郷隆興、桐野利秋、篠原國幹等の引率する一万余の將兵に包圍せられ、三ヶ月の及しきに亘つてよく籠城に堪えた。官軍は有栖川宮城に親王を征討總督と陸軍中将山縣有朋、海軍中將村松義等の軍隊が救援のため南下してきたので薩軍は包圍のまゝ別働隊をして田原坂、植木の嶺でこれを迎撃した。實に七晝夜に及んで、はげしい戦ふくり返された。この合戦で薩軍の將篠原國幹は戦死し、戦況は不利となった。漸々後退して熊本城のかこみをとく。故郷、城山に立籠り、ここを最後として頑強に抵抗した。刀は折れ、彈丸はつきて西郷隆盛は五十才で自殺した。時に明治十年九月廿四日全滅したのである。

○ 板倉氏の始祖にフッて

庭頼藩主板倉氏は本姓は清和源氏にして、應徳年間(一〇八四—一〇八六)奥州の清原氏の乱を平定して、號名を馳せた源義家から出た苗裔である。義家から七代後ちの義頭になつて初めて板倉氏を名乗つたが、後ち波川姓に改めた。義頭から九代の義鏡が死去して、其嗣が絶えたので、足利義氏の裔、義亮が宗家を嗣ぎ、その子の三男頼重になつて再び姓を板倉氏に復した。居所は三河國額田郡小美村にして、代々松平氏に仕へた家柄である。頼重の子を好重といひ、その子が勝重である。(第九輯系譜篇板倉家並に第三輯寺院篇松林寺参照)

△ 板倉勝重  
幼名 甚平 通稱は四郎左エ門 伊賀守 従四位 待從

室は粟生筑後守藤原永勝の女 元和元乙卯年六月十三日卒  
(永勝は祿高三千石三河國美梨村に討死した家系は詳でない)

後室 同じく永勝の女

勝重は天文十四年三河國額田郡小美村に生れ、幼少にして出家して香譽宗哲とす。父好重は討死し、兄忠重は松平好景の宗家を継ぎ、弟の定重が板倉家を相続したが、天正九年三月廿三日徳川家康の軍に従つて高天神の役に戦死したので、徳川家康の命によつて勝重は還俗し、弟の定重のあとを継いだのである。慶長六年九月京都所司代の要職につき七千石を賜ふた。大坂の役には大坂城内の獄勢を仔細に探索して幕府に報じて有利に展開した功によつて一万六千石を加増せられた。(所司代とは禁濶を衛り京都所奉行及び奈良伏見兩奉行所を管し、また二條城のことなどを掌つた。時代によつて多クなつてゐるが、板倉勝重以後常に置かれていた幕府の重要な役人である)。

元和九年に日蓮宗京都妙覚寺の日叟上人と反対派の京都十五ヶ寺との間に宗義にフッて争論を醸した際、勝重が幹旋役となつて内満に解決した。その時の折紙に  
祖師以来の制法たるによつて他宗の志に受施せず殊に諸勳進以下之を出さざるの儀尤も其意を得候 向右京中へ勸進の儀申出の旨此れありと雖も 當宗の儀は先規先例に任かせ相除くべきの状如件

元和九年癸亥十月十三日 板倉伊賀守勝重 在判

法華宗眞俗中

とあり。これに對して京都法華宗一統は他日の異議なきため尤の連判状を差出した。



京都諸寺法理一統の建署  
此度板倉伊賀守殿結目の御折紙について衆会を遂げ重々談合仕り  
先規に任かせ申請の上は諸寺一統たるべく候此儀に於ては毛頭私  
の異議あるまじく候之のため建署此の如くに候 以上

元和九癸亥十月二十日 十五寺院 連署

この覚書によつて一應は宗門の内訌が終つたかにみえたが、一年も  
立たない寛永元年四月に勝重が死去して再び崩れ始めた。これは徳  
川家康の愛妾のお方の方の勤きも加はつて、身延山派と池上本門寺  
派との論争がまさき起り、対論の結果受不施派と不受不施派の區別が  
劃然としたのである。このお方といは紀伊大納言頼宣、水戸中納言頼房の生母で法華  
宗の遵信者であつた。家康が元和二年四月十七日池上を討つた時、お方は落飾して養珠院（妙紹日心大  
師）といふ家康のなかつた三十七年位の養母二年八月廿四日七十七で不歸の客となつたが、生前  
貞操賢明な女性で、内意にあつては將軍家を勤めず威勢を執つたのである。なつてお方衆  
院日經上人が浄土宗の齋山和尚と法論した時、家康は日經上人の非をあげてお方とよく迫つたこと  
がある。この時日經上人は「お方の方に後援をたのんだ。家康はこれを聞いて怒り日經上人を  
禁錮した。養珠院は家康に諫言した。お方に入れられず頑として應じなかつたので、養珠院は  
喪服を着て自ら処刑を俟った。家康はついに意を離れて日經上人を赦免した。この時の俗  
謡に「お方の〇〇〇の毛は長いよ、江丹までとどく」とうたつた。幕府は政治上  
宗教のことについては表向干渉を控えていたが、かなり口角を出したようである。偶養珠院の弟に  
三浦長門守為春と、紀州家の長臣が、日經上人に帰依して「禁錮謗施誨」を唱へたのに對  
し身延の日乾、日遠両上人が「破真記」を著して、これに反論した。そこでまた日經上人は池上  
本門寺の日樹上人と計つてこれに對抗した。養珠院は身延派を擁護したので、幕府は果敢  
、寛永七年四月に反身延派の僧侶を多く追放した。これが身延対論といふのである。日經上  
人はすでに前の三月十日に遷化して、たので、この論争は免れた。この対論があつて、三十八年間

△ 身延山は訴訟書を提出すること案に三百六十回にも及んで不受不施派の禁制を訴上したの  
である。時の寺社奉行加賀氏甲斐守忠澄はついにこれを容れず、寛文五年に不受不施禁止の令を  
出した。爾来二百十三年に至り、明治九年四月十日日經上人の努力によつて再興をみるに至つたのである。  
信仰の力ほど盛大なものはない。禁令中多くの信徒はあらゆる迫害と弾圧を受た血なまぐさい悲慘な事  
件が各地に起つてゐる。歴史上幾多の記録が遺つてゐるが、(第七輯人物篇自証院日經上人參照)  
勝重は寛永元年甲子年四月廿九日卒 法諡 長円寺殿際山源英大居士  
八十才 三河國曹洞宗 長円寺に葬る。

長円寺は板倉氏の正統葬地にして、三河國幡豆郡貝吹村曹洞宗万燈山長円寺といふ。板倉  
勝重の同墓にして法号によつて寺名とす。これより以後、代々ここに葬る。母菩提所である。  
后室 初め 中島興五郎重次に嫁ぎ一男二女を儲けたが、重次が討  
死したため、勝重に再嫁した。一男を重好といひ、中島氏を相継ぎ  
せ、二女は勝重の養女とした。勝重との間に三男三女を生んだ。  
長子を重業といひ、下総國南宿領主五万石に治したが、その子重仰  
の代に備中松山領主(いまの高梁)五万四千石に移封した。これは松  
山藩の始祖で明治維新まで続いた。重宗の弟を重昌といふ。(別項參  
照) (中島重好の六代後ちを興五郎勝英といふ。元祖から八代目である。享保の頃に知行所、居所  
とも三河國大崎にして、標高は六百石を領し、御船手奉行を勤めた。年始に出府の際は毎歳松  
山藩に校倉國防守の下屋敷に止宿したといふ。)

都窪郡吉備町下撫川

# 丸中運送

吉備局電二七八番

各種ボール・パッキングケース製造

## 大善紙工業株式会社

下撫川一三三。吉備局電 352 353 番